

かがやき

Hiroshima City Hospital public relations magazine

Kagayaki

多職種協働による チーム医療

広島市立広島市民病院
副院長（耳鼻咽喉科部長） 井口郁雄



昨年の今頃は、当たり前前の日常が続くものと楽観的に考えていました。新型コロナウイルス問題がこれほど深刻化し、長引くとは想像していなかったからです。未だ先行きが見えない中、当院では患者さんに安心安全で質の高い医療を提供し続けられるよう日夜努めています。

コロナ禍で改めて感じるのは、多職種協働によるチーム医療の重要性です。当院の基本理念は、「患者さんと協働して、心のこもった、安全で質の高い医療を行います。」ですが、これを実現するための3つの柱の第一に「チーム医療を推進し、信頼され満足される医療を行います。」と掲げています。そして、以前から多職種によるチーム医療に力を入れてきました。

チーム医療を担うのは、主に医療系スタッフや事務系スタッフで、医療系スタッフだけでも、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師、臨床放射線技師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床工学技士、管理栄養士、医療ソーシャルワーカーなど多くの職種に及びます。一人一人の患者さんに対して、様々な専門スキルを持つ複数のスタッフが連携・協働しながらチーム医療を実践しています。今日では患者さんやご家族にもチームの一員に加わって頂いています。

当院において多職種で構成されているチームは、感染対策チーム（ICT）、栄養サポートチーム（NST）・褥瘡対策部会、

緩和ケアチーム、摂食・嚥下・口腔ケア（SEK）チーム、化学療法検討チーム、糖尿病療養指導チーム、呼吸サポートチーム（RST）、リエゾンチーム、在宅医療支援チーム、周産期トータルサポートチーム、認知症ケアチーム、排尿ケアチームなど10以上に上ります。

多職種協働を成功させるためには、それぞれの専門職が職種の垣根を越えて円滑なコミュニケーションを図れる環境作りが大切です。各分野の専門スキルを相互に理解するのに役立つ他、自由に意見交換ができれば、チーム医療を実践する上での意思決定や問題解決がスムーズに行えると考えます。また、今回のような不測の事態に遭遇した場合には、多職種が各役割を担い、コミュニケーションを図りながらチームとして連携・協働することが一層重要になると痛感しました。

当院は引き続き、患者さんの生活の質（QOL）の維持・向上、患者さんの人生観を尊重した診療の実現を目指して、チームで医療を提供して参ります。より愛される病院としてさらに発展できるよう努力しますので、今後とも広島市民病院をよろしく願います。



就任のご挨拶

この度、副院長（事）看護部長に就任いたしました長谷川でございます。

私は広島市民病院に入職して三十数年を迎え、これまでに内科・外科・耳鼻科外来・呼吸器外科・救命センター・地域連携の部門を経験し、看護部では教育関連の担当をしました。

さて、今年度は新型コロナウイルスによる影響で、未曾有の災禍となり先を見通しづらい状況であります。私は病院幹部の一人として、地域の人々と働くスタッフの健康、そして、組織が活力をもって生き延びることを最優先に考え、「責任」と「弾力性」のある行動をし、病院スタッフと一致団結してこの難局に立ち向かいたいと思います。

私は毎日、自分自身に起こった出来事の中で、「嬉しかったこと探し」を日課にしています。例えば、通勤途中の風景の中で何気ない変化に気づけたことや、美味しい物を食べたことなど、それは本当に些細なことで構わないのです。嬉しかったことや良かったことを人に対して行えば、他者理解や自己効力感を高めることができるそうです。これは、小学校の道徳の授業にも使われています。そして、特に、「思いやり」のところが生まれるといった大変良い面があります。これは、当院看護部の理念でもある「やさしさ」と「思いやり」にも通じています。一人一人が、他者を敬うことのできる「やさしさ」と「思いやり」を持ち、互いに認め合い、自己理解できる職員が、真に患者さんに寄り添うことができるのだと思います。

当院看護部には、約1,000人の看護師、助産師、業務員、保育士が在籍しています。そして、今年度は38名の新人看護師を迎えました。入職早々、オンライン研修に変更するなど、今までの教育計画とは異なる方法での育成を開始することになりました。その新人看護師も入職後1年が経過し、コロナウイルスに負けない自立した看護師を目指し、着実に力をつけ頑張っています。また、令和3年度の新人看護師へも、臨床実習経験が十分でないことへの不安を軽減し、安心・安全に働くために、新たな教育計画を検討し準備しています。

私は、「責任」と「弾力性」のある姿勢で臨み、看護部の「やさしさ」と「思いやり」のある良質な看護を提供できるよう、管理者として努めて参りたいと思います。未熟な私に、このような大役が果たせるのか不安ではございますが、地域を守り、命を守り、安心・安全な医療を提供するために、患者さんをはじめ、地域の皆様の声を聞かせて頂きながら、積極的に現場の改善につとめたいと思いますので、何卒よろしく願い申し上げます。



副院長(事)看護部長
長谷川 聡子



患者さんに愛され信頼される病院へ

この4月から事務長に就任しました三村です。

広島では、今年3月から新型コロナウイルス感染症が拡大したことにより、着任早々から病院長の指示のもとで感染症策を講じる必要がありました。当院は、高度急性期医療を担うとともに、365日24時間休むことなく一次救急から三次救急までの患者さんを受入れている病院です。年間約31,000人の救急患者さんが受診されるわけですから、そのことを念頭に置いて感染対策を考えていく必要があります。

また、当院は、経営改善、職員の長時間労働などの課題があります。当院の医師をはじめとする医療スタッフはよく働きます。もちろん人の命や健康を預かり、病気を治すのですから、状況によっては、医者、看護師は眠ることさえも惜しんで治療する必要があります。そのために長時間労働となり、体を壊す危険性がありますし、そればかりか生活をも壊してしまう可能性があります。より良い医療を継続して提供していくためには、患者さんのご理解とご協力のもとで、これまでのやり方を見直しルールを作り、長時間労働にならないようにする必要があります。

当院は広島市民をはじめとする多くの患者さんに利用していただいています。昨年度の1日の外来患者数は1,700人以上、743床ある病床の利用率は約95%です。今後も、このように多くの患者さんに受診していただくためには、医療技術を更に高めていくだけでなく、サービスを良くしなくてはなりませんし、老朽化していく施設を改修していく必要もあります。

市民病院として患者さんに愛され、信頼される医療機関であり続けるため、病院長を支え素晴らしいスタッフと一緒に、こうした課題に真摯に取り組んでいきたいと思っています。今後とも広島市民病院をよろしくお願ひします。



事務長
三村 誠

基本理念

患者さんと協働して、心のこもった、安全で質の高い医療を行います。

～基本理念実現のための3つの柱～

1. チーム医療を推進し、信頼され満足される医療を行います。
2. 地域医療機関との連携のもとに、救急医療と高度で専門的な医療を行います。
3. 健全な病院経営を行うとともに、すぐれた医療人の育成に努めます。

患者さんの権利に関する宣言とお願い

広島市立広島市民病院は、信頼され満足される医療を提供するため、次のような患者さんの権利を尊重します。

1. あなたには、個人として尊重される権利があります。
2. あなたには、良質で適切な医療を平等に受ける権利があります。
3. あなたには、診療に関して十分な説明と情報提供を受ける権利があります。
4. あなたには、自分自身の治療などについて、自分の意見を述べ、自ら決定する権利があります。
5. あなたには、当院での医療に関するプライバシーを保護される権利があります。

これらの権利を守り、より良い医療を実現するには、患者さんと医療提供者とが力を合わせて取り組む必要があります。そのため、患者さんも積極的に医療に参加・協力する責任があることをご理解のうえ、ご協力くださるようお願いいたします。

外来診療のご案内

診療受付時間

午前8時30分～午前11時00分
※眼科／火曜日
午前10時00分まで
診療科によっては休診日がありますので事前にご確認ください。

休診日

土曜日・日曜日・祝祭日・8月6日
年末年始(12月29日～1月3日)

紹介状持参のお願い

初診時、他の医療機関からの紹介状をお持ちでない場合、保険診療費のほか医科5,500円、歯科3,300円(H28年8月から)のお支払いが必要となります。初診の際には、紹介状をお持ちください。

救急外来CT装置が更新されました

2020年12月救急外来に、新世代320列 AreaDetector CT「Aquilion ONE PRISM Edition」（キャノンメディカルシステムズ株式会社）を導入いたしました（図1）。

この装置の特徴は、最大で160mm（0.5mm厚で320スライス）という広範囲を同時に撮影できることです。

最新型である今回の装置は上記CT装置の第5世代にあたり、最短で脳や心臓全体を最短0.275秒で撮像可能で、最新のAI（人工知能）技術を用いて、被ばく低減・画質の改善・画像作成速度の高速化を実現しています。また、Spectral技術（2種類のX線を用いて撮像・処理を行う技術）も搭載されており、造影剤減量や被写体中の物質の弁別が可能となっています。

例えば、当院の特徴の一つである急性期脳血管障害治療では治療開始までの時間を短縮しながら、的確な診断をする必要があります。本CT装置では、専用画像解析装置Vitreaと組み合わせることで、短時間で脳動脈と血行動態を診断することが可能となり、脳の病変部での救済可能領域を評価することができ、専門家へ素早く質の高い画像情報を提供できます（図2）。

その他にも広範囲に高速に撮像することで体の動きの影響も受けにくくなり、特に心臓CT検査では、従来装置では多くの心拍データをつなぎ合わせて画像を作成していたものが、1心拍内の最適時相のみのデータが使用できるため、画質の向上・被ばく低減が可能となっています（図3）。また日常よく行われる頸部～骨盤部の検査でも、撮像そのものは5～6秒で完了し、検査の負担が大きく軽減されます。



図1
今回導入されたCT装置と画像解析装置

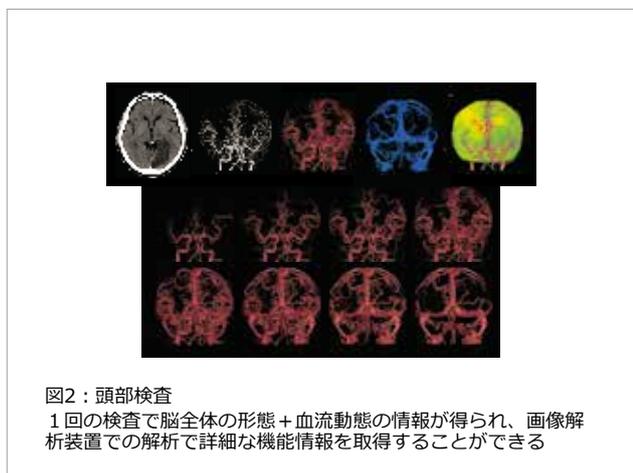


図2：頭部検査
1回の検査で脳全体の形態＋血行動態の情報が得られ、画像解析装置での解析で詳細な機能情報を取得することができる

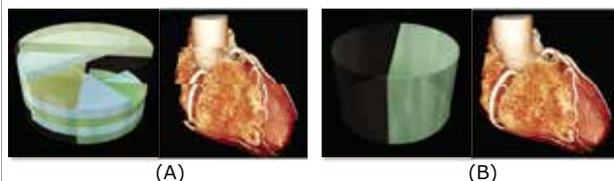


図3：冠動脈検査
(A)：従来のヘリカルCTでの心臓CT検査
従来のCTでは多くの心拍データをつなぎ合わせてそれぞれの断面の画像を作成するため、繋ぎ目でずれが生じる場合がある
(B)：今回導入されたAquilion ONEでの心臓CT検査
最短0.275秒・16cm幅で撮像できるため、1心拍内の至適時相データのみを用いた、ずれない画像が得られる

病院薬剤師って何してる？

病院の薬剤師はどんなことをしているのでしょうか？「医師の指示通りに薬を用意して、渡すときに説明してくれる。」そんな印象を持たれることが多いかもしれませんが、そういった業務以外にも適切で安全、安心な薬物治療を提供するために、見えないところで多岐にわたる業務を行っています。最近では「アンサング・シンデレラ」という病院薬剤師を描いた漫画が発刊、ドラマ化されるなど、“縁の下の力持ち(=アンサングヒーロー)”として患者さんのために奮闘する病院薬剤師に注目が集まっています(アンサングとは「褒められない」という意味)。ここでは、まだまだ知られていない病院薬剤師の業務について、いくつか紹介します。

○調剤

調剤とは、医師が記載した処方箋に基づいて、飲み薬や注射薬などを準備・交付する業務です。みなさんが一番イメージしやすい業務ではないでしょうか。薬剤師は処方箋に記載された薬をそのまま準備するのではなく、医師とは異なる視点で「処方箋の内容が適切かどうか」を必ず確認します。例えば、薬の種類、用量、飲み合わせなどで、疑問点や不明点があれば、医師に確認します(疑義照会)。薬剤師の疑義照会や提案により処方箋の内容が変わることもしばしばあります。

例①：食後に服用すると効果が落ちてしまう薬が、毎食後で記載されていた→空腹時に飲むように変更

例②：月に1回飲むだけで効果が期待出来る薬が、毎日服用するよう記載されていた→月1回に変更

○入院患者さんの薬物治療管理

入院中に安全で有効な治療を安心して受けていただけるよう、各病棟に専任で配置されている薬剤師が薬の確認や説明をおこなっています。また、薬による治療の効果や、副作用の有無、検査値などについても日々確認をおこなっています。

1. 持参薬管理

持参薬とは、入院時に持ってきていただく、患者さんが普段使用されている薬(常用薬)のことです。薬剤師が持参薬を確認することにより、入院中に使用する薬との重複や、飲み合わせによる悪い効果などを避けることができます。

2. プレアボイド報告(治療や副作用防止に貢献した事例の報告)

プレアボイドとは薬剤師が関わることによって患者さんの不利益を回避または軽減した事例のことをいいます。薬による副作用、飲み合わせによって効果が強く出過ぎる、治療効果が十分に得られない、など様々な不利益を薬剤師が関わることで未然に防いだり、早期に発見したりしています。当院は日本病院薬剤師会へのプレアボイド報告を積極的に行い、薬剤師の役割を皆さまに理解していただけるよう努めています。

○チーム医療への参加

当院にはNST(栄養サポートチーム)、ICT(感染対策チーム)、PCT(緩和ケアチーム)など医師・看護師・薬剤師等の医療スタッフで構成される様々な多職種チームがあります。各チームにはそれぞれの専門的な知識や認定資格をもった薬剤師が参加しており、薬の専門家としての知識を生かして、皆さんにより良い医療を提供できるよう活動しています。

当院の薬剤師が有する主な専門資格

がん専門薬剤師、感染制御専門薬剤師、精神科専門薬剤師、小児薬物療法認定薬剤師、糖尿病療養指導士、栄養サポートチーム専門療法士、緩和薬物療法認定薬剤師など、専門領域に強い多くの薬剤師が在籍しています。

○製剤

特別な空調設備を使用した清潔な部屋(無菌室)で、様々な薬を調製しています。

1. 院内製剤の調製

特定の患者さんの治療には必要不可欠であるにも関わらず、様々な理由で市販されていない薬を院内製剤として調製しています。

2. 高カロリー輸液の調製

高カロリー輸液療法は、食べ物から十分に栄養を取れない患者さんに、点滴により栄養を補充する治療法です。もし、点滴の中に細菌が入ってしまうと、栄養が豊富な点滴の中で細菌が増殖してしまうため、清潔な環境で調製する必要があります。当院では、市販品では不十分な患者さんに「クリーンベンチ」という作業台を使って、一人一人に合わせた高カロリー輸液を無菌的に調製しています。

3. 抗がん剤の調製

がん患者さんの治療に使われる抗がん剤の調製を行っています。抗がん剤は催奇形性や発がん性があり、取り扱いには十分に注意する必要があります。当院では「安全キャビネット」という作業台を使って、安全に調製を行っています。

○抗がん剤の安全管理

「かがやきNo.37」に詳しく特集されていますので是非ご覧ください。

その他にも医薬品情報管理業務、薬品管理業務、治験事務局業務、薬薬連携など、今回紹介しきれなかった業務がまだまだ沢山あります。このように、私たち病院薬剤師は「皆さんにより良い医療を提供するために、何かできることはないか？」と模索しながら様々な業務を行っています。



抗がん剤を調製している様子



調剤室の風景



注射薬自動払出システム